

金谷神社大鏡鉄の由来について

An Inquiry into the "Daikyotetsu" (A Big Mirror made from Iron Plate) in Kanaya Shrine

井 上 孝 夫
Takao INOUE

[目次]

- 第1節 はじめに
- 第2節 大鏡鉄にかかる伝説と解釈
- 第3節 大鏡鉄に関する調査研究
- 第4節 「大鏡鉄=塩釜」説の提起
- 第5節 大鏡鉄伝説の分析視点
- 第6節 「釜の蓋」への信仰
- 第7節 日本寺の梵鐘とのかかわり
- 第8節 大鏡鉄の民俗社会学的考察
- 第9節 結語

<文献>

第1節 はじめに

富津市南端の金谷地区は通称「浜金谷」と呼ばれ、東京湾を隔てて神奈川県久里浜とを結ぶフェリーの発着港として、また房総の名山鋸山への登山口としても知られている。

この金谷という地名の由来はたたら師、鍛冶師、鑄物師といった文字どおり金属にかかる職業「金屋」によるものだろう。実際にこの地には金草という製鉄関連地名が残されているし、平野（1961:8）の指摘によれば、金山（カンニヤマ）、金糞（金草と同一か）、大釜戸といった製鉄関連地名も残されている。さらにこの地には養老4年=720年の創建と伝えられる製鉄神・金山彦を主祭神とする金谷神社が鎮座している。そしてこの金谷神社に保存されているのが「大鏡鉄」とか「鉄尊様」とか「釜の蓋様」などと呼ばれている2枚に割れた円盤状の巨大鉄板である。

この鉄板は一体どのような目的でつくられ、またこの地域においてどのような意味をもっていたのだろうか。この小論では房総の製鉄文化を考えいくうえで欠かすことのできない、「大鏡鉄」の由来を独自の視点から解明してみたい。

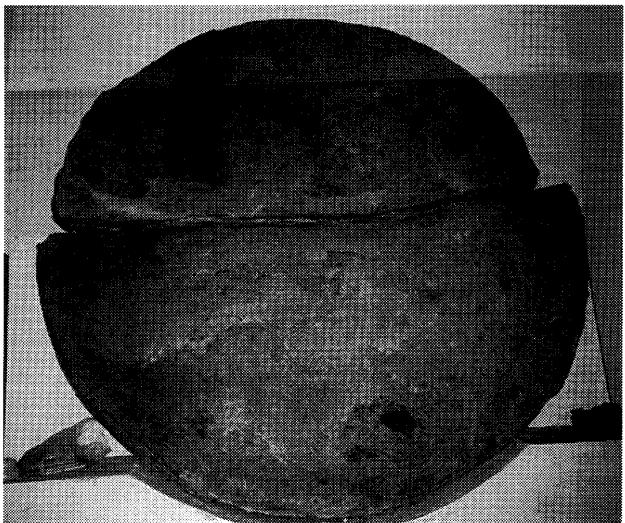
第2節 大鏡鉄にかかる伝説と解釈

この大鏡鉄については、地元におよそ次のような伝説が語り伝えられている。

文明元年（1469年）の6月のこと、7昼夜にわたって暴風雨がつづくなか、金谷の沖に何か光を放つものが認められた。地元の人達は嵐の収まるのを待って、その場所へ行ってみると、巨大な鉄板らしきものを発見した。だがあまりの大きさに海から引き上げようとしても上げることはできず、金谷神社に祈願した。すると翌7月1日になって、この鉄板は真二つに割れて、何とか引き上げることができ、金谷神社へと奉納された。



金谷神社



大鏡鉄

また金谷華蔵院の由緒書（文化12年＝1815年5月）は金谷明神（金谷神社）相殿の「鉄尊大明神」について、次のように記している。

「右ハ往古海中引上候鉄ニテ作り候丸キ形ニテ、凡差渡シ壹丈六尺位、厚サ六寸程鏡ヲ表シ候形故鉄尊ト崇敬仕、則金谷大明神相殿ニ奉祝候、是亦金ノ神、金山彦命之社ハ鉄ヲ以テ作り候神鏡之形タル故、金谷大明神ニ神号相通之事ニ御座候間、鉄尊ト奉祝外ニ別号無御座候、右享和三亥年六月再建仕候」（『富津市史（史料集2）』1980年、262頁、に収録）。

この伝説と鉄板の存在は近世になって、広く知られるところとなり、鉄板の由来に関してはいくつかの説（解釈）が出されている。

その代表的な見解は江戸時代の国学者、平田篤胤（1776-1843）によるもので、その著『玉だすき』（巻5）のなかには、「王の東征し給ふに、軍衆の乗たる船はなほ数艘ありて、其船ごとに大鏡を懸けたるが中に、沈みたるもの有りて、其に懸けたる鏡にやと思はる」といった記述が残されている。もっともこの記述は日本武尊の東征伝説を下敷きにしたものである。日本武尊の時代には船の舳先に大鏡を掲げて航海をしていたとされ、鉄板はそのためにつくられた鏡だというのである。大鏡鉄という名称の由来はこの日本武尊の伝説に基づく、というわけである。

この解釈はあるいは、古典に詳しい当時の知識人によって流布されていたものを採録しただけのものなのかもしれない。しかしそうだとしても、記紀に登場する日本武尊はその実在性すら疑われているのだし、さらに古代に海中に沈んだ鉄板が数百年を経てほぼ原型のまま引き上げられて今日に伝えられているということはほとんどあり得ないことだと思われるから、到底信用するわけにはいかないだろう。

では、この鉄板は民衆のあいだではどのように考えられていたのだろうか。それを知るには、いくつかの地誌資料が参考になる。中村国香（1709-1769）の『房総志料』（1761年）は「天羽郡金谷に釜神の祠あり。殿内に大なる鉄の釜の蓋あり。厚八寸、円七尺五寸。相传、海龍王厨下のもの也と」と記して、この鉄板が海龍王のものだということを指摘している。またこの記述を受けて、田丸健良（1774-1845）の『房総志料続編』（1832年）は「釜の蓋と称する物、今祠後の窟中に納めて有り。半月形のもの二枚、幾年を経し物なるか、今に腐化せず。金谷の名、蓋し此の鉄蓋に依りてか。鉄尊大明神と奉む」としている（これらの著作からの引用にあたっては旧字体は新字体に改めた）。ここには日本武尊の伝説は全く出てこない。鉄板はあくまでも海の支配者ともいるべき海龍王ゆかりの「釜の蓋」であり、そこから「釜の蓋様」として信仰され、その文脈から「鉄尊様」（鉄尊大明神）とも呼ばれていたのである。

このように、金谷神社に納められた鉄板の呼称である「大鏡鉄」、「釜の蓋様」、「鉄尊様」にはそれぞれのいわれ

がある。いずれも伝説といってしまえばそれまでだが、後者の「釜の蓋様」のいわれについては伝説の原初的なかたちを伝えるとともに、民衆意識を表現するものとして重要である。

第3節 大鏡鉄に関する調査研究

大鏡鉄は1967年12月2日に「金谷神社の大鏡鉄」として、千葉県文化財に指定された。その指定理由は生産文化上の貴重な資料であるとともに、民俗的資料としても重要な観点からの評価に基づくものである。それに前後して、日本刀や製鉄技術の研究家として著名な長谷川熊彦による調査と報告が行なわれている。これは科学的な調査に基づく研究ということで大きな意味をもつものであるが、その要點は次のようなものである。

- (1) 大鏡鉄は4部6部の割合で2枚に割れているが、つなぎ合わせると直径160センチ、厚さ11センチ、重量約1.5トンの円盤状の形態をしている。外觀は槌打ちの跡があり、平滑面ではなく、研磨された様子もないから、鏡として使用されたものではないだろう。
- (2) また外觀は鍛鉄にみえるが、成分分析の結果をみると一般鍛鉄であり、実際のところは「鍛鉄と鎔鉄の中間品」と考えられる。その製法は大鏡鉄の大きさからみて単一の炉でつくるには無理があり、2つの炉でそれぞれつくられた半溶解物を炉外に出して槌打ちしたものと推定される。
- (3) 製造年代は北条氏の勢力が旺盛だった中世の建長年間(1250年頃)、船で運搬中に難破して海中に沈み、200年間放置されたのちに、伝説にあるように海中から引き上げられたものと推理される。
- (4) 製造場所は千葉県側の製造地の根拠が得られないこと、立地条件や微量のニッケル、クロムを含む砂鉄の成分の特徴などから考えて、神奈川県の三浦半島と類推できる。
- (5) 製造目的は再度融解して二次加工品をつくるための粗製の地金である。2枚に割れているのは製造時に使用者による切断の便宜をはかるために前もってタガネ目をつけておいたことによるものだろう。

以上が長谷川(1966)による調査結果と考察の概要である。これはおそらく大鏡鉄に関する最初の科学的な調査であり、その意義は大きい。特に大鏡鉄の製造方法、製造目的、製造場所に関する考察は一つの説としていまなお価値をもっている。

だがいくつかの疑問点もある。まず伝説をそのまま肯定して、大鏡鉄は海中から引き上げられたものだということが前提になっていることである。水深がどのくらいの海底に沈んでいたのかは定かではないが、いずれにしても重量1.5トンもの鉄板をどのようにして引き上げたのか、という疑問は残る。また200年ものあいだ海底に沈んでいた鉄板の内部が腐食しないで、表面が酸化しただけで引き上げられるということがあり得るのだろうか。さらに大鏡鉄が地金だとしても、運搬の便宜を考えればより小さな地金をいくつかつくりおいた方が都合がいいはずであり、その製造目的についても疑問が残る。さらに2枚に割れている点に関しては、2炉で別々につくられたものが一度接合され、改めて分割されたというのは何とも不自然な感じである。

このように長谷川説は先駆的な意義をもつものとはいえ、その検討結果には疑問も残り、大鏡鉄に関する完全な考察とはいひ難い側面をもっているといわなければならない。

第4節 「大鏡鉄＝塩釜」説の提起

この長谷川説のあと、窪田藏郎は長谷川自身の要請を受けて1970年に大鏡鉄調査を行ない、その結果に基づいて次のような指摘をしている。

- (1) 大鏡鉄は湯の注ぎ足しによる層状組織を呈する銑鉄鑄物である。
- (2) 寸法からみて、周防、長門、太宰府觀世音寺などに例のある塩焼の平釜と推測される。
- (3) 発生年代は1000年から1300年のあいだだろう。

(以上、窪田、1973=1987:215-216、より要約。)

この窪田説は大鏡鉄の用途に関して、説得力をもった有力な見解を提示している。その意味では、長谷川説の不十分なところを補完するものといえるだろう。ただし、大鏡鉄と民間信仰などの文化にかかわる問題には言及されていないのは残念な感じはある。

その後、村上正祥（日本食塩製造株式会社顧問）は窪田説とは異なった観点から、大鏡鉄は煎塩用の塩釜として使われていたものではないか、という新説を提起した（村上、1980, 1984）。[図1]は村上による実測に基づいた大鏡鉄のスケッチである。村上は大鏡鉄の形状、特にその寸法と両端に高さ2センチ、幅7センチほどの縁がついていることから、正倉院文書等に記載のある奈良時代の「煎塩鉄釜」だと断定している。以下は村上説の要約である。

(1) 煎塩鉄釜は国内製造ではなく、中国からの舶載品であり、当時としては極めて貴重なものであった。大鏡鉄はこのような形式の塩釜の底板に相当するものであり、塩釜としては縁に漆で塗り固めた側壁をつくって用いられた。

(2) このような塩釜はのちの時代になると、運搬や製造の便宜をはかるために分割された数片が漆喰で塗り固められた底板のものとなるため、一枚板のものは時代としてはより古い形式のものである。一枚板の煎塩鉄釜はおそらく中国の唐の時代に製造された鉄板だろう。

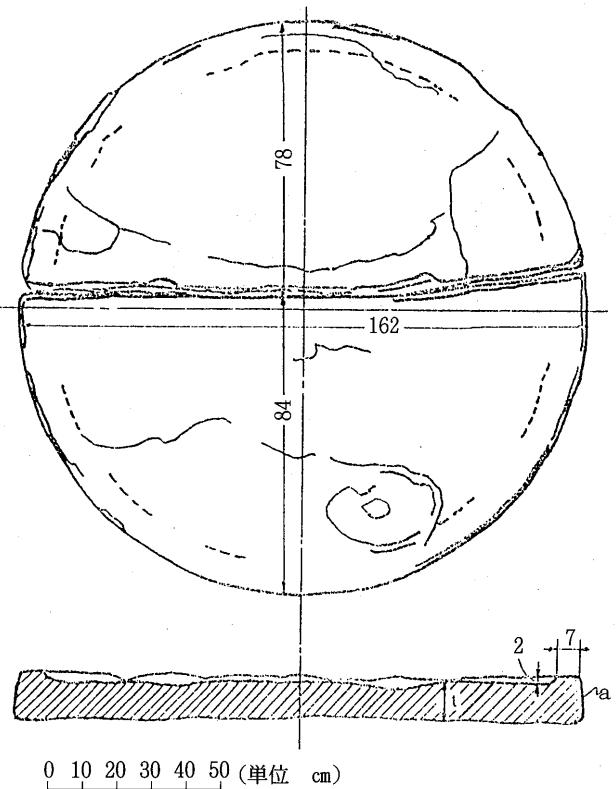
この説は製塩技術に詳しい研究者の立場から提起されたものであり、それなりの説得力をもっている。しかし形状の類似性に基づく考察は「大鏡鉄＝煎塩鉄釜」説の必要条件ではあっても、十分条件を満たしているわけではない。

そこで、いくつかの疑問が浮かんでくる。最大の問題は奈良時代に輸入された塩釜がなぜ金谷の地に存在しているのかということである。この点に関して村上は「これがどのような経路を経てこの地にもたらされ、かつ言い伝えの如く文明元年に見出されたものかは、全くわからないことであるが、あえて想像を許されれば、奈良時代武藏国あたりに勢力を張っていた豪族のところへ運ばれる途中、海難によって沈没したのではなかろうか」としている（村上、1980:45）。ここでも大鏡鉄が海中から引き上げられたという伝説が前提になっている。しかも海中に沈んでいた期間は長谷川説よりも長く、同様に腐食の問題が疑問点として出てくる。また「想像」という断りがあるとはいえ、武藏の豪族のところに当時としてはとびきり貴重な塩釜が運ばれて行く理由もよくわからない。さらに2分割されている理由については全く言及されていない。金谷の大鏡鉄は一枚板ではないのであり、その点では奈良時代にもたらされた塩釜とは異なっているのである。もし大鏡鉄が奈良時代の塩釜だというのならば、なぜ2分割されて現存しているのかを説明しておく必要があるはずである。

いずれにせよ、この村上説は先行研究である窪田説を超えるものとはいひ難いように思われる。

第5節 大鏡鉄伝説の分析視点

第二次大戦後になって行なわれた大鏡鉄の科学的研究も、この鉄板が海中より引き上げられたということを無批判に前提としている点で、問題が残されている。大鏡鉄の海中引き上げについては伝説の域を出るものではない、と疑ってみる必要がある。例えば寺院の梵鐘が海中より上がったといった伝説は一定程度の普遍性をもって

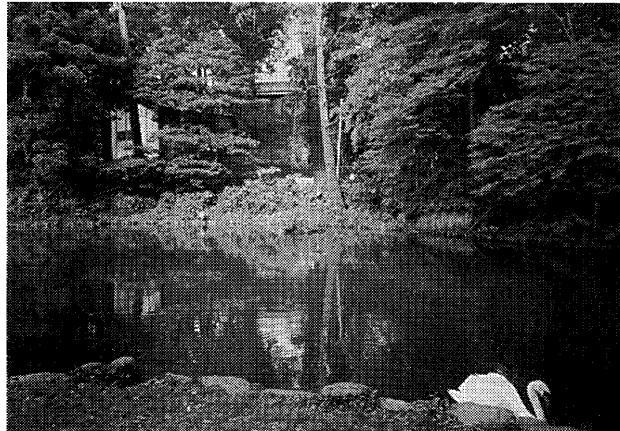


[図1] 大鏡鉄の実測図
(出所) 村上正祥 (1980:42)。

みられる類型化されたものである。房総でいえば、館山市出野尾の「安房の高野山」といわれる小網寺の梵鐘（国指定重要文化財）は弘安9年（1286年）物部国光の作だが、海中出現の伝説をもっている。またその逆に、陸上にあった寺の鐘が海や池などに沈んだとする沈鐘伝説も類型的なもので、君津市内蓑輪の九十九坊鐘ヶ淵の沈鐘伝説はよく知られている（この鐘ヶ淵は1969年4月18日に千葉県指定史跡になっている）。これらを踏まえていえば、鉄板が海中より引き上げられたという話も伝説の域を超えるものではなく、そのまま信じるわけにはいかないのである。

また伝説中の7日7夜の暴風雨のあと7月1日に鉄板が引き上げられたという部分についても独自の意味がありそうである。例えば平野馨は日本武尊伝説とのかかわりからこの大鏡鉄に言及し、この7という数字について素数であるがゆえに「忌むべき数だった」として次のような指摘をしている。

「数としては最も基本的である1と、割りきれない数として最も小さい3との組み合わせ、つまり1と3の二つから成立する7という数は古くから神聖で神秘的な特性を持った忌数であった」（平野、1961:8）。



鐘ヶ淵

つまりこの伝説のなかで7という数が出てくるのは史実ではなくて、ある観念、それも宗教的な観念の所産だというわけである。

さらに、平野は言及していないけれども、より決定的なことは鉄板が引き上げられた7月1日というは「地獄の釜の蓋が開く日」とされているということである。だから伝説にいう6月末の暴風雨というのも地獄の釜の蓋の開く前兆現象だったのであり、7月1日に引き上げられた鉄板とはまさしく地獄の釜の蓋だったといれっきとした「意味」が存在するのである。地元の民衆が「釜の蓋様」と呼んで信仰しているのは、こうした宗教的観念が反映しているからだろう。

このようにみていくと、大鏡鉄にかかわる伝説は巨大鉄板を前にした民衆の宗教的意識を表現しているものといえるだろう。このことを別の側面からいうと、金谷の地名由来となった金屋集団の製鉄文化が直接的なかたちで民衆意識のなかに反映されたものとは必ずしもいえない、ということである。そこにみえてくるものは一種の文化的断絶といってよいのではないだろうか。つまり、大鏡鉄と直接的にかかわる金屋の存在は忘れられ、ただその宗教的な意味合いを求めようとした結果がこのような伝説に反映されているということだろう。

このように伝説の語る「物語の世界」を内在的に把握してみると、はじめてその伝説のもつ固有の意味合いがみえてくる。それは伝説がまさに生まれようとしている一つの社会状況であり、そのなかに伝説を語り伝える主体とその行為が具体的な像を結ぶのである。この分析視点は民俗社会学的な視点と呼ぶことができるだろう。このような視点に基づいて伝説の「資料批判」を行ない、それをつうじて、伝説のもつ現実的な状況とそこでの意味合いを把握することができるはずである。

第6節 「釜の蓋」への信仰

伝説では、7日7夜の暴風雨は海竜王がもたらしたものとされ、そのあと地獄の釜の蓋が開いて、大鏡鉄は2分割のうえに引き上げられた。だからこの鉄板は伝説に即していえばあくまでも「釜の蓋」なのである。そこで「釜の蓋」への信仰というものがどのようなものなのかを検討しておくことにしよう。

釜と信仰とのかかわりでまず思い浮かぶのは高岩山の山頂にある釜（鉄鍋）だろう。伝説では源頼朝がこの地を通った際に飯を炊かせた釜ということになっているが、実態は雨乞いのための釜とされ、次のようにいわれている。

「江戸時代あたりまでは、近在の人々が竹筒にこの釜の水を汲んで一気に山を下り、自分の田畠にこの竹筒の水を流すということをしていました。そうすると一天にわざにかき曇り、雨が降って池は潤ったといわれる。そして、人々はそのお礼に、竹筒に水を入れて運び上げ、この釜に水を返納した。よってこの釜の水は涸れることがないという」（千葉県山岳連盟、1973:102）。

だがこれはあくまでも釜への信仰であって、「釜の蓋」への信仰とは異質なものだろう。そこで釜の蓋への信仰について思いをめぐらせてみると、浮かび上がってくるのは君津市釜神（旧君津郡貞元村釜神）にある神将寺の存在である。この寺の本尊である薬師如来を安置する薬師堂の屋根上には「釜」が祀られている。実際には写真にみるよう、釣鐘型の逆さにしたような釜なのであるが、それには次のようなわざがある。『房総志料統編』から引用しておこう。

「土人曰、釜上薬師如来は、むかし釜の蓋にのりて、小糸川を流れ來り此所に着き給ふ。故に此處を釜上といふ。別当神将寺、小糸川の南岸にあり。」

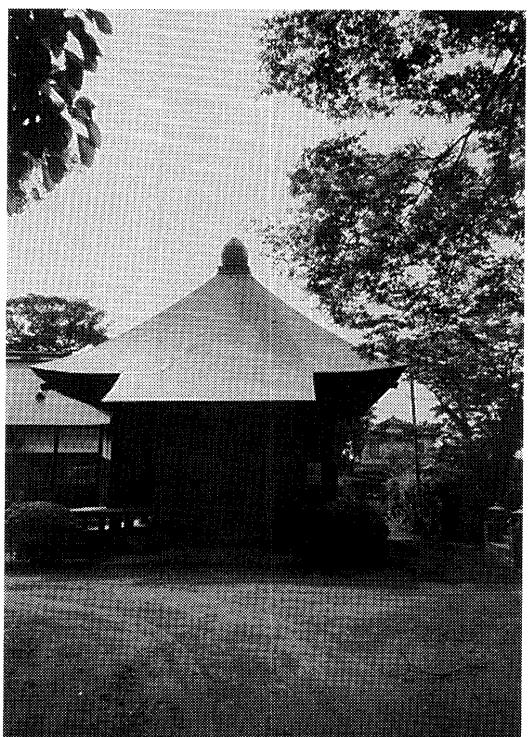
この寺の本尊薬師如来は釜の蓋に乗って小糸川を流れて来て、この地で釜神薬師如来として祀られた、というのである。実際にこの寺は小糸川に隣接し、周辺の地名も釜神となっている。ただし、釜の蓋、釜、釣鐘の区別は明確になされてはいない。当初の釜の蓋への信仰はいまでは逆さに祀られた釜（釣鐘）への信仰へと変化しているようである。

それはともかくとして、金谷に近接する旧君津郡にも釜や釣鐘に対する信仰があったのである。その信仰について、藤沢衛彦編（1917:328）は『金龍城札記』の記述に基づいて独自の見解を示しているが、それを筆者なりの視点に基づいて整理すれば、次のようになる。

中国では海の神の蛇は金氣を嫌うといい、その蛇を鎮めるために、鉄器を岸辺に安置したり、海中に沈めたりした、という。これと同じ観念に基づいて、航海の安全や水難予防の意味を込めて、釜や釜の蓋を海中に沈めたり、岸辺に安置したりしたのである。

確かに蛇は金氣を嫌うといわれている。その蛇のイメージが膨らんだのが龍であり、金谷の伝説では海の神は海竜王といわれている。おそらくこのような信仰の背景には釜や釣鐘を製作する製鉄集団の存在があったはずである。

この神将寺のある旧貞元村は貞元親王（清和天皇第3皇子）のゆかりの地であることから名づけられたといわれる。貞元親王は近江国からこの地にやって来て、れんげの栽培法を教え、延喜9年（974年）にここで没したといい、親王の屋敷跡や墓所などが残されている。それより溯って古代律令の時代においてこの地は「湯江郷」と呼ばれた製鉄地帯であった（柴田、1992:132-133, 136-138）。その伝統を引き継ぐ製鉄集団が中世に



神将寺薬師堂



貞元親王の墓所

おいても活動し、神将寺の釜の蓋伝説をもたらしたと考えることができるだろう。

それはともかくとして、釜神信仰ではこのように釜の蓋と釜とが一対のものとして信仰されている。では金谷の鉄板の場合、そのような可能性はあるのだろうか。

第7節 日本寺の梵鐘とのかかわり

大鏡鉄が釜の蓋だとすると、釜の本体に相当するものはどこにあるのだろうか。それらしきものは、金谷に隣接する鋸南町日本寺の梵鐘ではないかと思われる。この梵鐘は上総、安房の国境をなす明鐘（明金、妙金）岬の沖から引き上げられたとされ、これまた海中出現伝説（沈鐘伝説）を伝えている。ただしその真偽のほどは定かではない。だが金谷神社の大鏡鉄と日本寺の梵鐘という二つの海中出現伝説が極めて近接して存在する以上、両者の関連性について若干検討しておく必要はあるだろう。ここでは両者の関連性を日本寺の梵鐘の由緒を追跡するなかで検討してみよう。

日本寺の梵鐘には制作年代、制作者、奉納された寺院などの銘が刻まれている。一つはこの鐘が元享元年（1321年）に栃木県佐野の堀籠でつくられたというもので、制作者はト部助光、そして鐘は佐野の天宝寺に納められたという。もう一つの銘はこの鐘がその後、永徳2年（1382年）に鎌倉五山の一つ淨妙寺に移ったことを伝えるものである（『鋸南町史』1969年、469-470頁）。もともとの制作地である栃木県佐野は京都三條、福岡芦屋と並んで茶の湯釜の三大生産地であり、その名は天命釜として知られている。佐野はいわば鋳物師の里であるが、その起源は平将門の時代に将門の勢力に対抗して武器を製造するためにこの地に移り住んだ河内の鋳物師藤原国明の子孫に溯るものだという（窪田、1991:199-201）。

それはともかく、日本寺の鐘は佐野でつくられ、のちに鎌倉に移ったのだが、『鎌倉志』の記載によれば、鎌倉に移されたこの鐘は天正18年（1590年）に北条氏によって持ち去られてしまったという。北条氏は戦乱に際してこの鐘を陣鐘として用い、それがために鐘には槍の先で突いたような突き疵が残されている。だが北条氏もこの鐘を放棄してしまう。その理由はよくわからないが、おそらくは戦乱のなかで捨てられたか置き去りにされたのだろう。そして明鐘岬の沖に沈んでいたところを引き上げられ、日本寺の鐘として奉納された、という伝説が生まれたわけである。藤沢編（1919:14）によれば、鐘が引き上げられたといい伝えられている年代は天保9年（1838年）ということであり、もしそれが真実だとすれば、この種の伝説としては例外的に生々しさをもつてることになる。

このように日本寺の鐘は沈鐘伝説によって神秘化されてはいるものの、その制作から日本寺に納められるまでのあのおよその経過が明らかになっている。その経過に即していえば、金谷神社の釜の蓋の伝説とは年代的にみて大きなずれがあり、この二つの伝説は一応無関係なものとみななければならぬ（なお、中谷、1990:28、によれば、「[日本寺の] 梵鐘は元享元年（1321）の鋳造と言われ、1400年代に海中より発見された」とある。もしそうだとすると釜と釜の蓋とのかかわりが得されることになるかもしれない。しかし日本寺の鐘が1400年代に発見されたという根拠は何も示されておらず、ここで検討したような鐘の由来を覆すものとはなっていない。それゆえここでは、この中谷説は採らない）。

ただし、この両者は別の伝説でつながっているということはできる。それは「分属のタコ」といわれる伝説で、およそ次のような内容をもっている。

金谷村から引き上げられた釜の蓋は祈るに効験あり、それ以来、このあたりの海ではタコがたくさん取れるようになった。ところが海つづきの保田ではタコの数が減ってしまった。後年、明鐘岬の沖で光物が光るようになってからは保田でもタコ漁は回復し、鐘が引き上げられたときにはたくさんのタコが付いてきた。上総のタコは金谷明神が護り、安房のタコは日本寺の如来が護っている、といわれている（藤沢編、1919:15-17、より要約）。

この伝説の成立は日本寺に鐘が納められた年代以降のものと判断すべきだから、比較的新しいものである。その内容から判断して、金谷神社と日本寺がそれぞれ漁民層へ信仰を拡大、普及させていく過程でつくられたもの

といえるだろう。この伝説を解く鍵は鐘がタコツボに似せられて、海中より引き上げられた鐘に祈ればタコがたくさんかかる、という点にあるように思われる。しかしそこにはすでに、鉄や釜にかかわる原初的な信仰は失われているのではないだろうか。

第8節 大鏡鉄の民俗社会学的考察

大鏡鉄の伝説は、金谷の地名由来となった製鉄集団の固有の信仰や文化がこの地の民衆にある種の断絶を伴って伝えられていく過程を表現している。その点ではこの地の民衆にとって、大鏡鉄は海龍王の「釜の蓋」以外の何ものでもない。藤沢編（1917）が指摘するように、釜の蓋は金氣を嫌う海龍王を鎮め、海難予防をはかるという信仰に根差しているものだろう。つまり海底に釜（あるいは逆さにした釣鐘）のようなを地獄を想定し、そこに蓋をして海難を封じ込めるということだろう。

ではなぜ金谷の沖なのだろうか。それにはおそらく鋸山がかかわっているはずである。海上から鋸山を望む。当然その姿は海面にも映る。それはそのまま釜（あるいは釣鐘）を思い起こさせるものであり、地獄の釜へと連想は膨らんでいく。だから地獄を封じるためには、釜には蓋が必要だったのである。このように、釜の蓋への信仰はその根底にこのあたりの自然景観から生じる原初的な観念があった、ということができるだろう。

さらにつけ加えるならば、上総、安房両国の国境に位置する鋸山山麓になぜ薬師如来を本尊とする日本寺がおかれたのか。日本寺の開山由来となった「薬師如来は東方の教主なれば、日の本に象（かたど）りて日本寺と名づけしなり」（元禄10年=1697年の然室和尚による縁起）というのは明らかに、航海上の方位を得て航行の安全を祈る信仰とかかわるものだろう。日本寺の嘉永年間（1848-1854年）頃からの山号である「乾坤」も航行上の方位とかかわっているのではないだろうか。そして本尊の薬師如来も「唐の玄奘訳『薬師瑠璃光如来本願功德經』には、薬師瑠璃光如来を供養すると、その国境に安穏を得ることができ、無病歎樂をもたらすだけでなく、風雨時に応じて年穀の豊穣をもたらしてくれる、とある」（志田、1997:84）といわれるような信仰に基づくものにちがいない。

要するに、これらの信仰の背景には国境に鋸山が位置し、またこの地が航海上の要所だったということがかかわっているのである。そしてその後は、釜からタコツボへの類推によってタコの豊漁祈願への信仰が付け加わったのだろう。大鏡鉄はこのような信仰上の意味づけをもって、金谷神社に安置されたもののはずである。

ただしこの鉄板のもともとの姿は、すでに窪田（1973=1987:215-216, 1991:61n, 235）によって指摘されているように、塩釜（塩焼鍋）であったのかもしれない。特に大鏡鉄周囲に6センチほど（村上、1980:40, によれば、高さ2cm, 幅7cm）の縁取りがしてあったということを考えれば、塩釜に限らず、釜として実用性を意図してつくられたことはほぼ間違いないところだろう。そして製造時点では確かに貴重なものだった可能性が高い。だがその後、この釜の実用性は薄れ、ついには廃棄されたのではないだろうか。そしてかつては貴重だった釜も融解して再利用することが考えられたのではないか。大鏡鉄が2つに分割されているのは、輸送の便をはかるか、再利用をはかるかするうえで、とりあえず2つに分割されたのだろう。しかし何らかの理由からか、この2分割された鉄板は再度融解されて利用されることなく、中途半端な形で、しかも独特の伝説に彩られた信仰のなかで、この金谷の地で今日まで保存されることになったにちがいない。

しかし第2節で触れた大鏡鉄の伝説や華蔵院の由緒書では、金谷神社と大鏡鉄との関連性は間接的なものにとどまっているかのように記載されている。村で大鏡鉄が発見されたとき、それにふさわしい金属にゆかりのある金谷神社に奉納されたというのである。その金谷神社の祭神金山彦についてこの由緒書は次のように記している。

「金神金山彦命、五行之西之守護神也、当村者西上総之果ニテ金谷村ト申、殊ニ金谷大明神之本地阿弥陀如來華蔵院ニ往古有之候。」

確かに五行説では西方は「金」が当てられている。しかし西上総の果てで「金」というのはいささか観念的であり、こじつけ的なものだろう。やはり金谷の地名由来や金谷神社の存在は大鏡鉄と直接的に結びついているも

のと考えなければならない。つまり金屋の集団がこの金谷の地で金属生産を行なっていたのである（現在、金谷神社に保存されている大鏡鉄の脇には鉄塊がおかれている。このことは、この地やこの神社が製鉄とかかわってきたことを無言のうちに主張しているよう興味深い）。金谷神社や大鏡鉄は彼らの残した遺物にはかならない。しかし伝説では金屋集団の存在はすでに失われている。彼らはこの2分割された鉄板を残し、また金谷神社と金谷の地名（それは当初は小字であっただろう）を残して、この地を去って行ってしまったのである。そして残されたこれらの遺物は金屋集団とは関係のない人々によって、金屋の本来の意味とは結びつかないような独自のかたちで語り伝えられてきたということだろう。

最後に大鏡鉄がこの地にもたらされた時代背景であるが、伝説にいう中世の「文明元年」という可能性は高いと思われる。この「文明元年」には何らかの特別なメッセージが込められているのかもしれない。それを解説する手がかりは金谷地名の性格づけの問題とかかわってくるように思われる。上総地方の金谷地名、例えば木更津市の＜金谷＞や市原市下矢田の＜金谷＞の由来を考えると、いずれも中世の鎌倉幕府の活動に基づくものであり、その痕跡が比較的はっきりとしている。それに対して浜金谷の場合ははっきりとしない。このことは浜金谷の地名由来が木更津や市原の場合とは異なっていることを示唆しているのではないだろうか。つまり浜金谷の金屋集団は歴史の表舞台に立つ前にすでに飛び去って（別の場所へ移動して）しまっているのである。

このような観点から浜金谷の由来を考えてみると、明鐘岬のうえに建つ金谷城の存在が注目されてくる。なぜなら、「ロクロ師とタタラとは関係ふかくセットのようになって中世の城や館の近くにあるのも特徴である」（ぬめひろし、1988:258）と指摘されているように、中世において金屋と城とは深いかかわりがあるからである。

金谷城は真里谷武田氏の第2代・真里谷信興の築城によるものであり、安房の里見氏の北上を抑止するためにつくられた城の一つである（『日本城郭体系第6巻』新人物往来社、1980年、218頁）。しかし文明年間（1469-87年）に里見成義（房総里見氏2代）に攻められて落城している。そしておそらくこの時期以降、金谷城には里見氏が居城するものとなったのだろう（金谷城は里見義堯が居城していた天文22年=1553年に安房国の反乱で焼け、その際には安房妙本寺の僧侶・日我も被災している）。

金谷城のこのような来歴を考えると、この地の金屋集団は真里谷武田氏と関係があったのではないだろうか。しかし彼らは文明年間の里見氏による攻撃の時期あるいはそれ以前の時期に別の場所へと移動してしまう。残されたのが大鏡鉄である。そして地元の人達は彼らの残していったこの遺物にかかわって、独自の信仰の世界をつくりあげたということだろう。伝承でいわれる「文明元年」という年号はこの真里谷氏から里見氏への変化を示すものであり、これによって真里谷氏とかかわる金屋集団の存在も過去のものとして封じ込められたということだろう。

しかし大鏡鉄は真里谷氏以後のこの地域にとって、新たな意味づけをもつ大きな存在となったはずである。例えば、日本の地誌学の開祖といわれる鶴岡良弼（1845-1917）が『上総国誌』（1877年）のなかで、「神官からの聞き取り」として記述している次のような事態はこのことの一つの反映といえるのではないだろうか。すなわち、浜金谷はもともと倉波（倉並）という村名をもっていたが、この大鏡鉄の発見にちなんで、それ以後は金谷村に改称した、という事態である。つまり村名の変更に大鏡鉄がかかわっていたということであり、そこには大鏡鉄がこの地域に与えた文化的衝撃の大きさをみることができるはずである。あるいは、大鏡鉄が「地獄の釜」を封じ込める「釜の蓋」だという根強い信仰もその原初においては、真里谷氏や金屋集団といった過去の人々に対する鎮魂の意味が込められていたのかもしれない。

第9節 結語

大鏡鉄にかかわるこれまでの研究は伝説の世界の紹介や検討、あるいはこの鉄板の製造方法や用途に関する考察であった。それに対して、ここでは大鏡鉄や金谷神社の背後には金屋集団が存在するということを前提とながら、大鏡鉄とこの伝承の世界とを総合的に読み解こうとした。

大鏡鉄が歴史の表舞台に現れたとされる文明年間は、この地域において真里谷氏から里見氏へと政治的支配者が変動する時期に相当する。鋸山山麓の日本寺が里見氏系統の修驗道勢力（富浦の正善院）の支配下におかれた

のも、この時期以降のことだろう。こういった時期に、大鏡鉄はこの地域の新しい姿を象徴するものとして位置づけられ、独自の伝説をもとい、宗教的な意味が付与された。そこに今日に至るまで伝えられた大鏡鉄にかかわる伝説が生み出されたのである。

しかしこのことはその一方で、大鏡鉄を製造し、それを持ち歩いた金屋集団や彼らを庇護した真里谷氏の存在を過去のものとして、歴史の闇に封じ込めたということでもある。したがって伝説を読み解き、地域文化の実相を見出そうとする側は単に残された伝説の解釈のみならず、その背後にある広大な闇の世界にも光を当てていかなければならないのである。

<文献>

- 千葉県山岳連盟, 1973, 『房総の山』千秋社.
- 藤沢衛彦編, 1917, 『日本伝説叢書 上総の巻』日本伝説双書刊行会.
- 藤沢衛彦編, 1919, 『日本伝説叢書 安房の巻』日本伝説双書刊行会.
- 長谷川熊彦, 1966, 「南関東地方に於ける古代鉄器及それ等の製造に関する研究（I）」『たたら研究』13:1-14.
- 平野馨, 1961, 『房総のやまとたける』房総民俗会.
- 菱田忠義, 1988, 「わが郷・天羽 連載25 金谷神社」『農協だより あまは』136:10-11.
- 片山正和, 1977, 「ナゾの巨大鉄」『房総異聞』創樹社:236-237.
- 窪田藏郎, 1973=1987, 『改訂 鉄の考古学』雄山閣.
- 窪田藏郎, 1991, 『改訂増補 鉄の民俗史』雄山閣.
- 村上正祥, 1980, 「千葉県金谷神社の『鉄尊様』について－奈良時代の煎塩鉄釜－」『日本塩業の研究』19:37-46.
- 村上正祥, 1984, 「塩釜と鉄」新日本製鉄編『鉄の文化史』東洋経済新報社:28-40.
- 中谷順子, 1990, 「乾坤山日本寺」荒川法勝編『千葉県史跡と伝説』暁印書房:26-31.
- ぬめひろし, 1988, 『地名譚』秋田文化出版社.
- 柴田弘武, 1992, 『風と火の古代史 よみがえる産鉄民』彩流社.
- 志田諄一, 1997, 『常陸国風土記と神仙思想』筑波書林.
- 田口勇, 1988, 「古代の塩釜か？ 金谷神社の大鏡鉄」『鉄の歴史と化学』裳華房:92-96.